



時事評論家 増田俊男

何故誰も日本を買わないのか

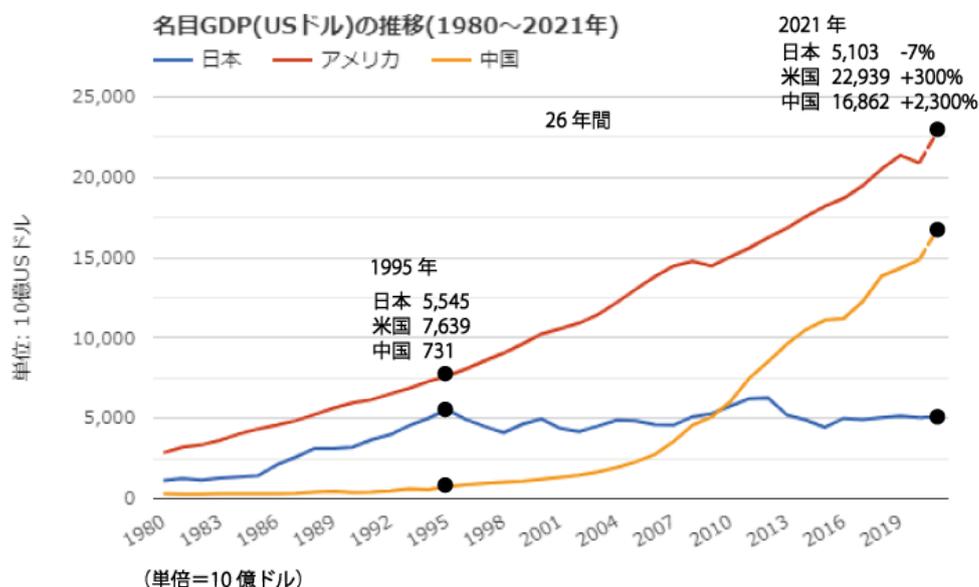
毎日東京市場でニッケイ 225 の株価を見ていると、ドン底から這い上がって 3 万円あたりになると必ず売り叩かれ、元の木阿弥(27,000 円台)になる。

懲りずにまた上げて来ると先の高値の手前で売り叩かれ、またもや元の木阿弥。

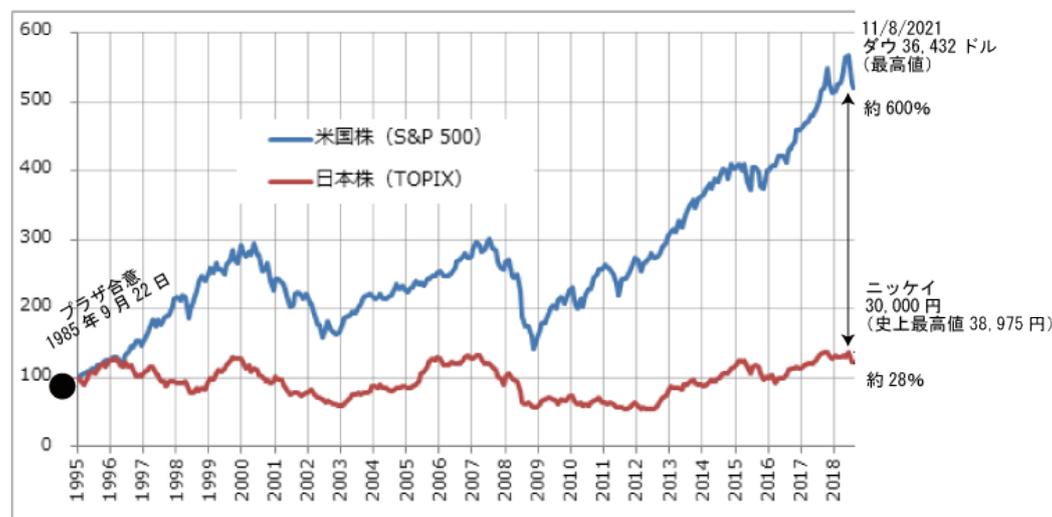
年初からニッケイがこのサイクルを繰り返している間に、ニューヨーク株価は年初来高値を更新し続けている。

市場では「日本と言えば即売り」が定着している。

下記は「インターネット国際政経塾(増田塾)」、「ここ一番!」と「目からウロコのインターネットセミナー」の皆様へ何度かお送りしたチャートである。

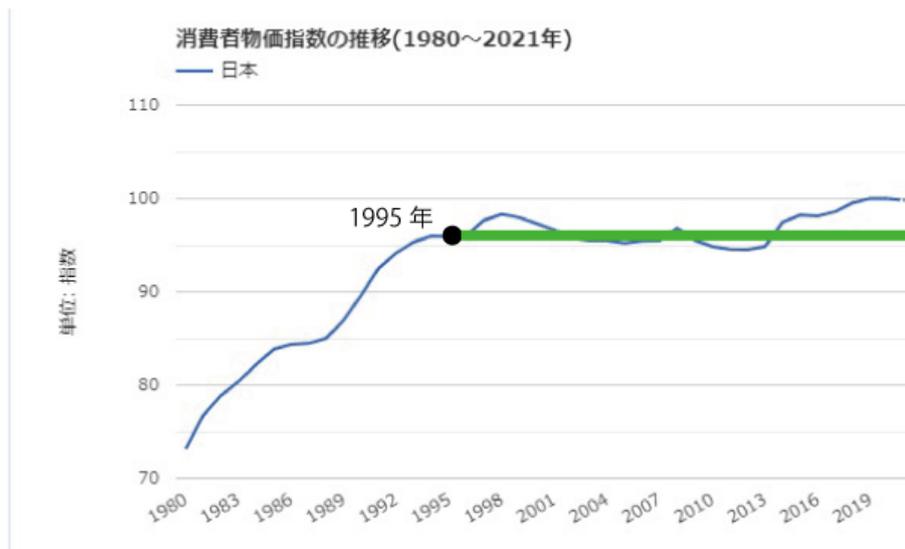


図：日米の株価指数の推移



〈注〉1995年4月を100とした指数

〈出所〉SPEEDAより大和総研作成



GDP(国内総生産)、株価、物価いずれも 30 年間全く不動、「失われた 30 年」どころかまるで「日本経済死に体」である。

リーマンショック直後の 2008 年 10 月から FRB(連邦準備理事会)は総額約 500 兆円規模の金融緩和を実施して潰れかかった金融機関、大手保険、さらにビッグスリー(大手三自動車会社)を救済した。

日銀はそれから遅れる事 5 年、2013 年 4 月 4 日、「異次元緊急緩和」の名の下に「2 年後物価上昇率 2%」を掲げて総額約 400 兆円規模の金融緩和を実施した。

2 年経っても物価上昇の兆しすら見えなかったため、緩和出口を取り止め、今日まで 8 年間同じことを繰り返している。

FRB は 11 月から毎月の量的緩和縮小が始まり 2022 年 6 月に終了、その後は利上げ段階に入ることを決めた。

欧州中央銀行も FRB 同様緩和の出口を決めている。

日銀は、馬の鼻先に吊るされた永遠に口に入ることのないニンジンをめがけて死ぬまで走り続ける馬のようだ。

大規模緩和の続行で自然淘汰されるべき産業が温存し、成長産業の足を引っ張り、生産性を後退させたばかりか容易なゼロ金利マネーで企業の財政規律が失われてしまった。

人体の血管と同じ働きをする銀行は預金と貸し付けの金利差激減と安全資産として保有しなくてはならない国債からの利益が、ゼロ又はマイナス金利で無くなってしまった。

血管(銀行)が弱れば体(経済)は持たない。

誰でも元気良い(新陳代謝が盛んな)子供(経済)は買うが、死に体は買わない。

ところが私は今年の年末の大納会にニッケイは最高値を付けると言う。

存在するいかなる経済指標やデータを見てもニッケイが買われる要因は皆無である。

それでも私は予想を変えない。

今日から 30 日以内に一体どんな「奇跡」が起きると言うのか。

それこそ「神のみぞ知る」である！

しかし神に聞かなくても知る方法がある。

日本の奇跡を知るには近日中に発行される小冊子 Vol.124「日本の奇跡、日本の運命」を読めば分かる。

増田俊男の「ここ一番！」大好評配信中！

投資にビジネスに一番役に立つ「ここ一番」。

「明日では遅過ぎるナウな情報」をその場で必ずお送りします。

現在、増田俊男の「ここ一番！」を FAX 又は e-mail にて配信しております。

詳しいご案内、お申込みについてはマスダ U.S.リサーチジャパン(株)Tel : 03-3956-8888、

HP : www.chokugen.com まで。

「時事直言」の文章及び文中記事の引用をご希望の方は、事前にマスダ U.S.リサーチジャパン株式会社 (FAX : 03-3956-1313) までお知らせ下さい。